

Title	民族的属性としての呪いと贖罪：エジプト逃避とジプシーの起源
Sub Title	Fluch und Buße als völkische Merkmale. "Die Flucht nach Ägypten" und die Herkunft der Zigeuner
Author	野端, 聡美(Nobata, Satomi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2009
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.96, (2009. 6) ,p.178(99)- 191(86)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00960001-0191

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

民族的属性としての呪いと贖罪

— エジプト逃避とジプシーの起源 —

野端 聡美

1. 伝承として語られる聖家族との接触

ヨーロッパ社会の少数派である「ジプシー」¹は、文学作品中に表現されるにあたり、多面的な民族の特徴を付与されてきた。本稿で焦点を当てるのは、ドイツロマン主義の文学作品において頻繁に言及されるジプシーの宗教的側面である。

現在までの民族学的、語学的研究によれば、ジプシーのルーツは西暦1000年頃にインド北西部パンジャブ地方を発ち各地に散った人々まで辿ることができる、とされている。ドイツ（語圏）へのジプシーの到着に関する最も早い記述は、リューベックやマグデブルクの年代記に見られる1417年のものである。その際現地住民から投げかけられた彼らの出自に関する問いに対し、ジプシーは「故郷エジプトを出立し、巡礼を続けている」と主張し、ローマ法王から授かったという、諸国の自由な通行を許可する書状を見せたという。²ジプシーがエジプト出身の民族であるという説はヨーロッパ社会に深く浸透した。日本語に定着した『ジプシー』も、英語の *Egyptian* から派生した呼称である。並行して、ジプシーのエジプト起源説を根拠付ける伝承も広まっていった。J. H. ツェードラー (Zedler, 1706–1751) の百科事典における記述によると、その伝承は以下のような内容である。聖家族がエジプト逃避の際ジプシーの祖先に宿を求めたが、ジプシーは彼らの宿泊を拒みすぎたく追い払ってしまった。この背信行為の

結果ジプシーは故郷を追われ、巡礼の旅に出る。罪が贖われぬ限り、憩うことなくさすらい続けねばならない。³ H. M. G. グレルマン (Grellmann, 1756–1804) が語学的研究に基づいた論文『ジプシー：ヨーロッパにおけるこの民族の生活様式、組織、慣習と運命を巡る歴史的試論、並びに彼らの起源について (Zigeuner: Ein historischer Versuch über die Lebensart und Verfassung, Sitten und Schicksale dieses Volkes in Europa, nebst ihrem Ursprunge, 1783)』において、ジプシーの民族的発祥の地はインドであることを明らかにした後にも、エジプト発祥の伝承は好んで受容された。後期ロマン主義作家のクレメンス・ブレンターノ (Clemens Brentano, 1778–1842) やアーヒム・フォン・アルニム (Achim von Arnim, 1781–1831) は、作品に聖書的な伝承を取り入れることで、ジプシー像に特別な意義を与えている。Köhler-Zülchは自身の論文においてジプシーにまつわる聖書的伝承について論じ、民族全体を宗教的罪悪と結びつける態度の背後には、魔女裁判的な、異端を社会から排除しようとする意図がある、と主張している。⁴しかし、聖書的な罪を背負った他者として描かれることが、単に社会からの排除を意味すると結論付けられるだろうか？ 瀆神行為のみでなく、贖罪を目的とした巡礼までもが民族的属性として描かれている事に留意し、ジプシー像の形成はより慎重に論じられるべきである。本稿では、ブレンターノの叙事詩『ロザリオのロマンツェ (Romanzen vom Rosenkranz 1803–1812, 1852年出版)』と、アルニムの小説『エジプトのイザベラ (Isabella von Ägypten 1812)』に織り込まれた、ジプシーの起源に関わる宗教的伝承を考証し、多数派の幻想としてのジプシー像の生成の意図を探ることを目指す。

2. 二作品における聖書の挿話

『ロザリオのロマンツェ』は、一族に負わされた罪を贖うために腐心する赤薔薇 (Rosarosa)、金薔薇 (Rosadore)、白薔薇 (Rosablanka) の三姉妹の人生を描く未完の叙事詩であり、序章としての詩と20の物語詩から成り立っている。Rosenkranzとは、文字通りに和訳すると「薔薇の冠」の意で

あるが、数珠をたぐり祈ることで聖母に霊的な薔薇の冠を捧げる行為と祈禱の用具であるロザリオそのものを示す。ここから推測できるように、作品中ジプシーは聖母崇拜と深く結びついて語られる。ブレンターノは後記(Paralipomena)の中で、『ロマンツェの前史に関する構想(Entwürfe zur Vorgeschichte der Romanzen)』という題のもと、薔薇の名を冠した三姉妹の一族の由来と、彼らに贖罪が課された経緯を詳しく記述している。以下にその概要を述べる：

エジプト逃避の際、聖家族はある盗賊一家のもとに身を寄せる。両親が聖家族を殺害しようとしていることを知った息子と娘は、マリアとヨセフに危険を知らせ、聖家族を逃がそうとする。幼子イエスは盗賊の息子の信心を賞賛し、「無垢な羊(Agnuskastus)」という名を授け、一族の罪が贖われるまで成長できないことを告げる。盗賊の娘リリスの婚約者はヘロデ王の命を受け、聖家族を殺すために盗賊の家を訪れ、マリアの婚約指輪を盗み出す。リリスは聖家族を逃す際、聖母マリアに蕾を持たぬ薔薇の枝を贈ろうとする。マリアの聖なる力で、それまで花をつけなかった枝に赤、金、白の三輪の花が咲いた。マリアは、指輪が盗まれたことによって一族が呪われたこと、呪いはやがて一族が生み出す三輪(人)の薔薇によって贖われることをリリスに告げた。聖家族が去った後、リリスと婚約者は両親の家を出て、ピラミッドで暮らした。彼らがジプシーの祖先となった。⁵

作品の本編である20の物語詩においては、リリスの子孫であるジプシーの一族はボローニャに住み、罪の意識に苦しみながら贖罪の方法を模索する。未完に終わったため贖罪が完遂した場面が描かれることはなかったが、薔薇三姉妹の胸に刻まれた薔薇の聖痕、リリスから受け継いだ一株の薔薇や聖母マリアの指輪、白薔薇が見る神秘的な夢、ボローニャの聖堂で営まれる赤薔薇の葬儀など、ジプシー一族がキリスト教的属性を帯びていることが強調されている。

Köhler-Zülch の研究によると、ブレンターノにジプシーと聖母マリアの接触に関する着想を与えたのは、アルニムがイタリア旅行中に聞き知った民謡 La Zingara である。⁶ブレンターノはこの民謡をドイツ語に翻訳し、『隠者新聞 (Zeitung für Einsiedler)』に『ジプシー娘 (Die Zigeunerin 1908)』という題のもと発表している。

ジプシー娘

奥様、神のご加護がありますように／そして神の幸福があなたにもたらされますように！／年老いた御夫君、ようこそお越し下さいました！／そしてあなたの美しい御子様も！

聖母

我々が進む道において／お嬢さん、あなたに神の恩寵がありますように／あなたの罪が赦されますように、／慈悲深き神は不滅なお方です。

ジプシー娘

巡礼の御方、さぞお疲れでしょう／あなたの御夫君も御子様も／屋根を必要とされているでしょう／親愛なる奥様もどうぞお泊りになって下さい。

聖母

あなたはどなたです、お嬢さん？／あなたは並外れて礼儀正しく／まことに善意に満ちていらっしゃる／私に救いの手を差し伸べて下さるなんて。

ジプシー娘

私はジプシーの女です／ならず者の一味ではありますが／どうぞ私の小屋にいらして下さい／どうか私の申し出を受け入れてください。

聖母

常に感謝され褒めたたえられますように／天にまします主よ／あなたの親切で優しいお言葉は／苦難の中で私の心を慰めてくれました。

ジプシー娘

どうぞ、お泊り下さい、奥様！／あなたは女神様のように／心休まらぬ私のような女の／心は愛で包まれたように感じます！

聖母

我々はナザレから来ました／どこにも宿が見つけれず／道行きに疲れ、知人もおらず／見知らぬ土地にあります。⁷

旅に疲れた聖家族に自ら進んで宿を提供したジプシー娘は、この後イエスの手相を読み、彼の運命を予言する。つまり、救世主である息子は磔刑に処され、復活するだろうと聖母マリアに告げるのである。

もう一方の作品、『エジプトのイザベラ 皇帝カール五世の初恋 (Isabella von Ägypten Kaiser Karl des Fünften erste Jugendliebe)』の作者は、ブレンターノと文学活動においてのみならず、私生活においても深い親交を持ったアーヒム・フォン・アルニムである。ブレンターノの『ロザリオのロマンツェ』成立のきっかけを与えた可能性が高いことも既に記した。同作品とはほぼ同時期に成立した小説『エジプトのイザベラ』においても、聖書時代に先祖が犯した瀆神行為によって民族全体が罪を背負うという前史が、物語世界の背景を構成している。両作品を比較すると、『エジプトのイザベラ』においては、後世の子孫が先祖の罪を憂い、これを贖おうとする態度ははるかに重点的に描かれており、巡礼途上の民族としての描写がより顕著である。以下がその概要である：

エジプトへ逃れて来て激しい雨の中宿を求めてきた聖家族を、ジプ

シーの先祖は冷淡に追い払ってしまう。幼子イエスが手を挙げて輪を描くと、雨はやみ空に虹がかかった。神の御子を冒瀆したことに気付いたジプシーの先祖達は巡礼の旅に出るためにエジプトを離れ、ちりぢりに世界へ散った。イスラム勢力の隆盛により故郷への帰路を絶たれたジプシー達の間以下のような伝説が流布していた。一族の王女であるイザベラが、世界の指導者と結ばれ子を成すことにより、念願の贖罪を完遂するというのである。父王を不当な迫害で亡くし、民族の指導者としての役割を担ったイザベラは、予言通りハプスブルク家のカール大公（後の皇帝カール五世）と愛し合い、身ごもる。ある時イザベラが聖堂で聖母像の前に跪き祈っていると、一族の罪は贖われ、エジプトへの帰還を許されたという啓示を受ける。一族の長としての使命を重んじたイザベラはカールの元を去り、息子と共に一族をエジプトへ導き、帰還を果たした後、長い間エジプト女王として君臨した。イザベラとカールはエジプトとスペインにおいて同じ日に没した。⁸

自らの民族的罪をジプシーがどのように捉えているかを、アルニムは以下のように描写している。

クリスト教徒たちが住んでいる地域の果てまで巡礼してみようと決めていたかれらの誓願はとうに果たされてはいた。というのも、すでにかれらは大洋を経てスペインから帰路についていたからであった。(中略) そうこうしつつもかれらは心の奥底ではいよいよ罪を感じていたのであり、こうしてエジプトめざして逃亡の旅をしながら、幼な子イエスと老いたるヨセフをともなう聖母マリアのもとに戻っていくというのに、じっさいはこのかた背いているのではないかという気持ちがつるのであった(中略)。こうして後にイエスはその死により救い主であったということを悟ると、それまでイエスを軽んじていたのであるが、一族の半分は、クリスト教徒が存在していそうな土地の隅々

にまで巡礼をつづけてそれまでの冷淡さを贖おうとしたのである。⁹

一族の悲願であった罪からの解放は、イザベラが受ける神秘的な天啓という形でもたらされる。

その花束はじつに快い芳香を彼女のほうに運んできたうえ、聖母が上からじつにやさしい眼で見おろしていたので、彼女は、自分の同胞の犯した罪さえ赦されたような気持ちになるのであった。「聖母マリアさま」と、吐息まじりに彼女は言った、「私どもの犯した過ちをお許しくださったのですか、あなたをないがしろにしている私どもを受け容れてくださるのですか」——このとき、聖母マリアの像が彼女にむかって親しげに首をふって背いたようにおもえ、心が帰依の念にすっかり浸され自我亡失の状態となり、…¹⁰

両作品に見られる、ジプシーの起源に関する伝承に一貫しているのは、彼らは聖家族を冷遇した宗教的罪人として描かれているものの、聖家族の予言や巡礼という行為によって、敬虔なキリスト教徒としての地位を保持していることである。彼らはいわば「キリスト教徒の中の異教徒」であり、聖書時代の記憶を持たぬヨーロッパ人の生活圏に、原初的な荒々しさを持って侵入するのである。

3. 民族的属性としての罪

前章において言及した二作品の背景となった伝承の他にも、多くの変形が認められている。いくつか例を挙げると、キリストを磔刑に処す際に使用された釘はジプシーの先祖が鑄造したものであるという説、アダムの子であり、弟アベルを殺したカインこそが、ジプシーの祖先であるという説を百科事典に見つけることができる。¹¹前者に関しては、鑄物師がジプシーの代表的な職業である、というイメージが市民の間に深く浸透していたこととの関連を容易に見出すことが可能である。後者もまた、ジプシー

の典型的行動様式とされてきた「放浪」を説明するために考案されたと考えられる。人類初の殺人者であるカインは、神罰として放浪を課され、それを妨げられないために額に烙印を受けた。カインを殺した者はその七倍の不幸を被るとされ、人々はその烙印を見ると恐れて彼に触れようとしなかった。それまで農業を生業としていたカインは、農作物が育たないという罰を受け、鋳物や楽器演奏によって生計を立てた。¹² 以上のような副次的な物語が、ジプシー像の背景的説明として機能したのである。

聖家族を冷遇したことへの報いとして一族全体が罰を課せられる、というトポスが、民族の存在規定に用いられたのはジプシーのみではない。社会の周辺部に位置するか、社会の下層を構成するに過ぎなかったジプシーとは対照的に、ヨーロッパ社会の文化、経済、政治的側面において自らの存在価値を肯定させるに至ったユダヤ人もまた、このトポスを通じて少数派として位置づけられた。ユダヤ人の宗教的位置づけをここで詳述することは避けるが、キリストを磔刑に処した民族というレッテルは、文化的文学的側面で頻繁に取り上げられる。ジプシーとユダヤ人は共に社会のマイノリティーとしての認識を得ており、「定住しない」「民族由来の土地を失っている」という属性を民族の定義の核としている点が共通している。こうした特性は例えば、「永遠のユダヤ人」というモチーフに象徴的に結晶している。「永遠のユダヤ人」という主題の原型となったのは、アハスフェール (Ahasver) という男に関しての以下のような伝説である：

磔刑の判決を受けたイエスが、十字架を背負い刑場であるゴルゴタの丘へ向かっていた。イエスはアハスフェールという名の靴屋の家の前で休息させてくれるよう頼んだが、アハスフェールは自分の家の軒を貸し与えることを拒み、戸口の前からイエスを追い払ってしまった。その時イエスは、彼に「私が戻ってくるまで、お前は待ち続けなければならぬ」と告げ、そこを立ち去った。アハスフェールは歳を取らず、最後の審判の日まで世界各地を放浪するよう運命づけられた。¹³

ドイツにおいては J. W. ゲーテ (Goethe, 1749–1832) がこの伝説を基にした詩を書いたほか、C. F. D. シューバルト (Schubart, 1739–1791) も、親しい人々に先立たれるアハスフェールの、不死ゆえの孤独と苦悩を主題に『永遠のユダヤ人 — 抒情的狂詩 (Der ewige Jude Eine lyrische Rhapsodie 1783)』を書いている。新約聖書にアハスフェールの名が登場することは無く、文献学的研究によれば、1602年に刊行された小冊子『アハスフェールという名前のユダヤ人の小物語』(Kurtze Beschreibung und Erzählung von einem Juden mit Namen Ahsuerus) がきっかけとなり、世間に広まったと考えられている。¹⁴

ユダヤ人のアイデンティティー形成に、「神罰としての放浪」が実際的な迫真性を持っていたと見なすのは現実的ではない。前述したように社会の上層にも帰属意識を持ちえたユダヤ人は、現実既に定住者であった。ユダヤ人を巡る「放浪」のトポスは専ら観念的なものである。ジプシーの生活態度もまた一つの型に括ることは不可能である。昨今は、彼らが住む国の政策や EU 統合をはじめとする新たな政治的気流の中で生活様式はますます多様化しており、定住者も増えている。ユダヤ人と比較すると、放浪型生活様式は未だに少なからぬジプシーグループのもとで顕在的ではあるが、文学上の表象は実際の生活態度に忠実なのではなく、観念的な創作によるものとするのが妥当である。

アハスフェールの伝説とジプシーの聖書的伝承は多くの共通項を持つ。どちらも、イエスや聖家族の安息を妨げるという罪を犯し、「永遠にさまよい続ける」という罰をイエスから直接言い渡されている。本稿のはじめで問題提起したように、Köhler-Zülch が主張したような魔女裁判的、異端排除的な意図は、こうした少数派の描写の一側面でしかない。社会に存在する少数派と聖書時代の関連を創り出すこと、もしくは強調することは、確かに標準的なキリスト教徒から彼らを区別することにはなるが、結果的に彼らを完全に排除することにはならない。なぜなら、文学的表象においてジプシーやユダヤ人が背負っている罪とは、イエス本人や聖母が直接彼らに課したものであり、それゆえ烙印であると同時に聖痕のような機能も果

たすからである。実際、『ロザリオのロマンツェ』の薔薇三姉妹は胸に薔薇の聖痕を持っていた。罪が贖われることを民族の悲願とし、永遠の巡礼を続けるジプシーやユダヤ人の意識は、常に聖書時代の記憶に呪縛されている。聖書時代の倫理基準や宗教観を保持したまま後世に存在していることは、ロマン主義的なジプシー表象で特に強調されている。実際、アルニムやブレンターノによる描写からは、宗教的罪人としてジプシーを睥睨する態度ではなく、むしろそうした存在に畏怖の念を抱く心性が読み取れる。次章では、異質な存在の肯定的受容は、どのような論理で説明可能であるか検討することを目指す。

4. ヨーロッパ側からの積極的ジプシー像受容

社会によって「異質」であると烙印を押されたにも関わらず、肯定的に受け入れられるとはどういう事だろうか？ ジプシーはヨーロッパ社会に同化不可能な民族として描かれている一方で、その由来は聖家族に関わる挿話に依って説明され、定住しない生活態度は贖罪のための巡礼として根拠付けられる。ジプシーを巡って見られるような、ヨーロッパ側からの「異質的存在」へのアプローチを分析するには、E. W. サイド (Said, 1935-2003) の『オリエンタリズム (Orientalism 1978)』や G. ジンメル (Simmel, 1858-1918) の『社会学 (Soziologie Untersuchung über die Formen der Vergesellschaftlichung 1908)』における記述を検討するのが有効である。サイドはオリエンタリズムを、東洋をあるがまま表象することをそもそもの目的としてはおらず、西洋が受容できる対象に書き換えることであったと主張している。『オリエンタリズム』において西洋側の「エジプト」受容に関して多くの紙面が費やされていることを鑑みると、エジプトを出身地として特定されたジプシーに対するヨーロッパ人の態度にも、類似する視点を見出せるはずである。

この教育的プロセス全体は、別に理解しにくいものでも説明しにくいものでもない。文化はすべて、生のままの現実に矯正を加え、これを捉え

どころのない対象から一定の知識へと変化させるものである。¹⁵

これまで扱ったことのない未知の物体の攻撃を受けたとき、人間精神がそれに抵抗するのは至極当然のことである。だからそこ、文化はつねに異文化に対して完全な変形を加え、それをあるがままの姿としてではなく、受け手にとってあるべき姿に変えてから受けとろうとしてきたのである。しかしながら、西洋人にとって、オリエント的事物はつねに西洋の何らかの側面と似たものであった。¹⁶

つまり、異質なものを受容するには、理解可能な文脈のうちに書き換える必要がある、というのである。ジンメルも『社会学』の中で『他者についての付論 (Exkurs über den Fremden)』において次のように主張している。

生まれつき、あるグループの独特な要素、一面的な傾向に固定されてはいないため、他者はこれら全てにある種の「客観的」な態度で向き合っている。その客観性は、単なる隔たりや無関心を意味するのではなく、疎遠性と親密性、冷淡さと積極性からなる形成物である。(中略) 客観性は決して非参加を意味するのではなく(なぜなら、非参加は主観的もしくは客観的態度とは完全に無関係な次元にあるからである)、むしろある種の積極的な参加である。(中略) 客観性を自由と呼ぶこともできる。客観的な人間は、所与の物事に対する彼の受容、理解、検討を先決してしまうようななどの固定性にも縛られていないからである。¹⁷

「異質な存在」であるためにはまず、疎遠性と共に親密性も兼ね備えている、つまり同じ歴史的ラインに立ち、同じ世界観を有していることが前提である。その上で、固定化した制度や人間関係からある程度切り離された故に獲得した解放性、客観性を保持した状態で社会に積極的に関わるからこそ「他者として在る」ことである。

第2章で、ブレンターノとアルニムの作品においてジプシーは巡礼途上にある民族として描かれている事は既に述べた。V.ターナー (Turner, 1920-1983) の主張を鑑みると、ジプシー像と結び付けられた「巡礼行為」は非常に示唆的である。ターナーは、人間社会を、分化、差別化された諸地位の体系であるストラクチャー (structure) と、既存の制度から脱却し、人間としての具体性、全体性を取り戻そうとするコムニタス (communitas) の二つの存在様式の相克によって成り立つと主張しており、¹⁸さらに『キリスト教文化におけるイメージと巡礼 (Image and Pilgrimage in Christian Culture 1978)』において、巡礼をコムニタスの側面を持つ行為であると論じている。¹⁹巡礼は宗教行為の範疇にある故に社会構造上の区分を完全に消し去るものではないが、人を聖地への途上という非日常に置くことで、日常生活の地位や役割や世俗的な時間から切り離し、人間としての全体性を取り戻させ、また永遠的な時間へと邂逅させるものである。

以上の考察を総括する。文学作品上のジプシー像が聖書の出自に関する挿話と結び付けられて表現される背景的意図は、排除を目的とする宗教裁判的な断罪のみに帰することはできない。むしろ、多数派が生活している社会ではもはや実効性が無い価値基準を未だに保ち続けている彼らの存在は、俗世の時間、地位、制度に束縛された多数派にとっての鏡像として機能する。民族の罪を贖おうとする、薔薇の三姉妹やイザベラに課せられた非現世的な使命は、市民社会の男性を魅了する一方、彼らを動揺させ、自己の多数派としての存在を内省するよう働きかける。さらに彼らの行動様式を「巡礼」に結び付けて解釈することによって、一般的規範からの離脱性はさらに強調される。つまり、定住できないことはジプシーの苦悩として描かれるが、社会に同化できぬ故に民族の神聖性は保たれている。本稿で取りあげた『ロザリオのロマンツェ』、『エジプトのイザベラ』の二作品においても、聖母マリアやイエスから言い渡された瀆神の罪は、呪いであると同時に選民の証である。罪の意識を持つ故に薔薇三姉妹やイザベラは信心深く、神秘的な夢を見、贖罪の完遂を告げる聖母の声を聞く能力を持つので

ある。宗教的罪人としての位置づけは、異質な行動規範を持つジプシーの存在を多数派に理解可能なコードに書き換える作業である。すなわち、彼らをキリスト教的世界観に取り込みつつ、多数派が暮らす共同体では保持不可能な客観性並びに主体性を帯びている存在と規定することで、憧憬の対象として、自己反省の契機として意味付ける過程である。

註

- 1 1971年世界ロマ会議において、*gypsy*、*Zigeuner*などの伝統的な呼称を蔑称として回避し、『ロマ』を公式呼称と規定したが、本稿において扱うのは、多数派であるヨーロッパ人に『*Zigeuner*』と呼ばれ、表現されてきたイメージであるため、日本語でこの語意に最も近いと思われる『ジプシー』を敢えて使う
- 2 Vgl. Gilsenbach, Reimar: *Weltchronik der Zigeuner*. Frankfurt am Main, 1997, S.47.
- 3 Vgl. Zedler, Johann Heinrich: *Grosses vollständiges Universal-Lexikon (1751–1754)*. Graz, 1961–1964, S.527.
- 4 Vgl. Köhler-Zülch, Ines: *Die Heilige Familie in Ägypten, die verweigerte Herberge und andere Geschichten von 'Zigeunern': Selbstäußerungen oder Außenbilder?*. S.50. In: *Die Sinti/Roma Erzählkunst*. Hrsg. v. Daniel Strauss. Heidelberg, 1992.
- 5 Vgl. Brentano, Clemens: *Paralipomena*. S.992–1010. In: *Werke in zwei Bänden*. Band I, Hrsg. v. Wolfgang Frühwald. München. 1982.
- 6 Vgl. Köhler-Zülch, Ines: S.48.
- 7 Brentano, Clemens: *Die Zigeunerin*. In: *Werke*. Band 1, Hrsg. v. Friedhelm Kemp. München, 1963–1968, S. 188–194. (野端訳す)
- 8 アヒム・フォン・アルニム『エジプトのイザベラ』、深田甫・訳、1975年、国書刊行会。を参照
- 9 同上、S.53–55.
- 10 同上、S.216–217.
- 11 Vgl. Zedler, S.522.
- 12 『聖書』新共同訳、1998年、日本聖書協会、S. (旧) 5–6。を参照
- 13 高橋規矩『シェリー さまよえるユダヤ人 一翻訳と研究』1991年、溪水社、S.137。を参照
- 14 同上、S.144。を参照
- 15 エドワード・W・サイード『オリエンタリズム』今沢紀子・訳、1986

- 年、平凡社、上巻 S.157.
- 16 同上、S.157-158.
- 17 Simmel, Georg: *Soziologie : Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung*. Berlin, 1968, S.510. (野端訳す)
- 18 V. ターナー『儀礼の過程』富倉光雄・訳、1976年、思索社、S.126-130. を参照
- 19 Vgl. Turner, Victor: *Image and Pilgrimage in Christian Culture*. New York, 1978, S.9-11.